

健康プラザ

— 平成19年8月号 —

見過ごされやすい“甲状腺の病気”

甲状腺は図1のように鎖骨の上、気管の前表面にあります。首の前面に甲状腺を触ることができるため、甲状腺の病気がないか？医師は検診で視触診を行います(図2)。甲状腺自身が腫れていたり腫瘍が存在する場合には気づかれることもありますが、触診のみではわかりにくいケースや形態的には正常でも機能的に異常を示し、気づかれないうちにいろいろな症状(表1)に悩まされていることがあります。甲状腺の病気は実は意外と多いの見過ごされやすい病気なのです。

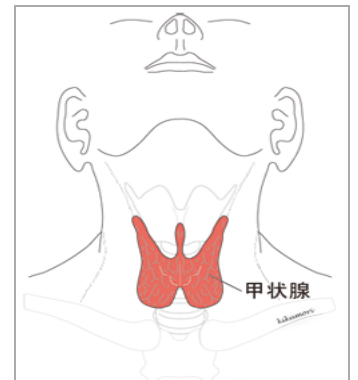


図1 甲状腺の解剖学的位置

1. 甲状腺機能異常の多彩な症状

甲状腺機能が異常を示す患者さんの症状は実に多彩であり、これまでもさまざまな病気と誤認されやすいことが指摘されてきました。「動悸や息切れ」のために心臓病が疑われたり、「イライラ」はノイローゼに見られたり、「高血糖」も糖尿病と診断されたり、「血清コレステロール値が高い」ために高脂血症と診断されたり、「記憶力低下や計算力低下」のために認知症と診断されたり、「動作が緩慢で傾眠傾向」のために脳卒中と間違われたりすることもあります。表1のごとく、甲状腺機能の異常が原因で引き起こされている病状でありながら、実際にはいろいろな診療科を受診されているケースがあります。

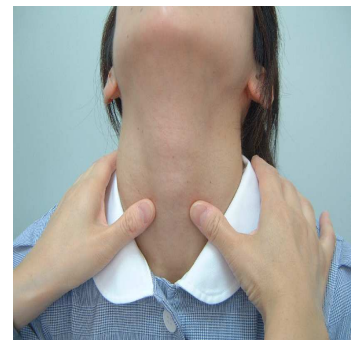


図2 医師による甲状腺視触診

表1に示すような症状があれば甲状腺疾患を疑い、図3のような方法で診断が進められます。

2. 甲状腺機能異常の頻度

甲状腺機能に異常が認められる頻度はきわめて高く、わが国における甲状腺機能亢進症こうしんしょうの頻度は200～300人に1人、甲状腺機能低下症の頻度は女性で実に20～30人の頻度で見つかるとも言われています。

3. 甲状腺の働き

甲状腺からはチロキシン(T4)、トリヨードサイロニン(T3)、サイロカルシトニンという3種類の甲状腺ホルモンが分泌されます。その甲状腺ホルモンの分泌が多かったり、少なかったりするといろいろな病気が起こ

ります。甲状腺ホルモンは主に体の栄養素や水分の代謝をうまくコントロール(新陳代謝)したり、自律神経のコントロールを行っています。甲状腺ホルモンが不足すると体のいろいろな代謝が障害されます。とくに妊娠中の胎児や新生児期の子供の脳の発達に重要であり、甲状腺の機能障害は精神発達遅延にもなりかねません。子供たちが正常に発育するために甲状腺ホルモンは必須のホルモンです。また、甲状腺ホルモンは成人においても代謝全般に大きく関与しますので甲状腺ホルモンの過不足には注意が必要です。血液中の甲状腺ホルモンの量が異常になると、表1のようにいろいろな症状が出ます。

甲状腺の病気は20代から40代の女性に多く、10人にひとりでは後で述べる**橋本病**や**バセドウ病**など、甲状腺の病気や異常をもっていると言われていています。特に妊娠している女性がこうした病気を発症すると、妊娠中毒症や流産などをおこすことがあり、胎児にも健康障害をおよぼすことがあります。軽症でなかなか気づかれにくく、見落とされたり別の病気と誤診されることがたいへん多い病気です。

甲状腺ホルモンはわずかな量で大きな生理作用を発揮します。甲状腺の働きは脳の一部であるかすいたい下垂体という組織で厳密にコントロールされています。下垂体からは甲状腺刺激ホルモン【TSH; Thyroid Stimulating Hormone】というホルモンが出されており、このTSHというホルモンによって甲状腺機能は調節されています。甲状腺ホルモンが少なくなると、このTSHの分泌が増加して甲状腺を刺激し、甲状腺から出る甲状腺ホルモンが増加します。逆に、甲状腺ホルモンが多すぎるとTSHの分泌が減少し、甲状腺も働きが低下して甲状腺ホルモンが減少します。このようにして人の体はいつでも体の状態に最も適した甲状腺ホルモン量が分泌されるように調節されているのです。

4. 甲状腺の病気

甲状腺の病気は大きく分けて3種類に分けられます。

1) 甲状腺機能亢進症

甲状腺機能亢進症は甲状腺ホルモンの合成・分泌が増えて、体の新陳代謝が必要以上に高められてしまうためにおこる病気です。わが国における甲状腺機能亢進症の大部分は**バセドウ(Basedow)病**です。またバセドウ病のほかにも何らかの原因で甲状腺の組織が破壊されて甲状腺内のホルモンが血液中に流出してしまうためにおこる**無痛性甲状腺炎**や高熱が出て甲状腺部が痛む**亜急性甲状腺炎**、ホルモンを分泌する腫瘍ができる**甲状腺機能性結節**などがあります。

バセドウが報告したバセドウ病の典型的な所見は、こうじょうせんしゅ ひんみやく甲状腺腫、頻脈、眼球突出という3つの大きな特徴(Merseburgの3徴)です。またバセドウ病は男性よりも女性に3~4倍多く、20歳前後から高齢まで幅広く見られますが、小中学生からの発病も報告されています。

バセドウ病の治療には①こうじょうせんやく抗甲状腺薬による薬物療法、②放射性ヨード療法、③手術療法の3種類があります。

① 抗甲状腺薬による薬物療法:メルカゾールやプロパジールなどの内服薬を服用します。副作

用として無顆粒球症むかりゅうきゅうしゅうや劇症肝炎げきしょうかんえんが現われることがありますので、発熱や咽頭痛、倦怠感などがあるときは直ちに医療機関を受診することが大切です。副作用は投薬開始後3ヵ月ごろまでに生じることが多いので2週間ごとに診察を受け、血液中の Free T₃, Free T₄ とともに血液一般検査、肝機能検査および検尿などの検査を行うことが望ましいと考えられます。

- ② **放射性ヨード療法**:ヨードを含む食物の量を制限しながら ¹³¹I という放射性ヨードを経口的に投与し、その結果甲状腺組織を破壊させることで甲状腺ホルモンの生成を減少させます。アメリカではバセドウ病治療の第一選択となっています。
- ③ **手術療法**:甲状腺の大部分または全部を摘出し甲状腺容量を減少させ、甲状腺ホルモンの分泌を低下させようとする治療法です。抗甲状腺薬で副作用がおこった人や短期間に確実な治療を希望する患者さんは甲状腺切除という手術療法が理想的です。

バセドウ病は放置すると心房細動、心不全など重篤な合併症を起こしたり、長期間に及ぶと続発性骨粗鬆症を起こすために医師の管理下でのきっちりした治療が必要です。さらに若い女性では低身長、無月経や不妊症の原因となることがあります。

2) 甲状腺機能低下症

甲状腺機能低下症はいろいろな原因で甲状腺の働きが衰えて血液中の甲状腺ホルモンが少なくなる疾患で、そのほとんどが甲状腺に慢性の炎症がある橋本病はしもとびょうです。1912年にわが国の橋本策博士がドイツ臨床外科雑誌に慢性甲状腺炎を初めて報告しました。後に、この病気の患者の血液中に抗サイログロブリン抗体が証明され、現在では最もポピュラーな自己免疫疾患じこめんえきしつかんとして認められています。一般成人女性の 20～30 人に一人の頻度で認められ家族内に発生することが知られています。治療は終生にわたりチラージン S などの甲状腺ホルモンを内服して Free T₄, TSH というホルモンを正常化させ臨床症状を改善させます。

甲状腺機能低下症には橋本病のほかに、甲状腺が破壊され萎縮したために甲状腺ホルモンが作られなくなってしまう特発性粘液水腫ねんえきすいしゅという病気もあります。

3) 結節性甲状腺腫

甲状腺内に腫瘍しゅりゅうができる病気です。腫瘍には良性腫瘍と悪性腫瘍とがあります。甲状腺ホルモンが過剰なのか少ないのかだけでなく、原因によって治療法も異なるのでまずは適切な検査を受けることが大切です。

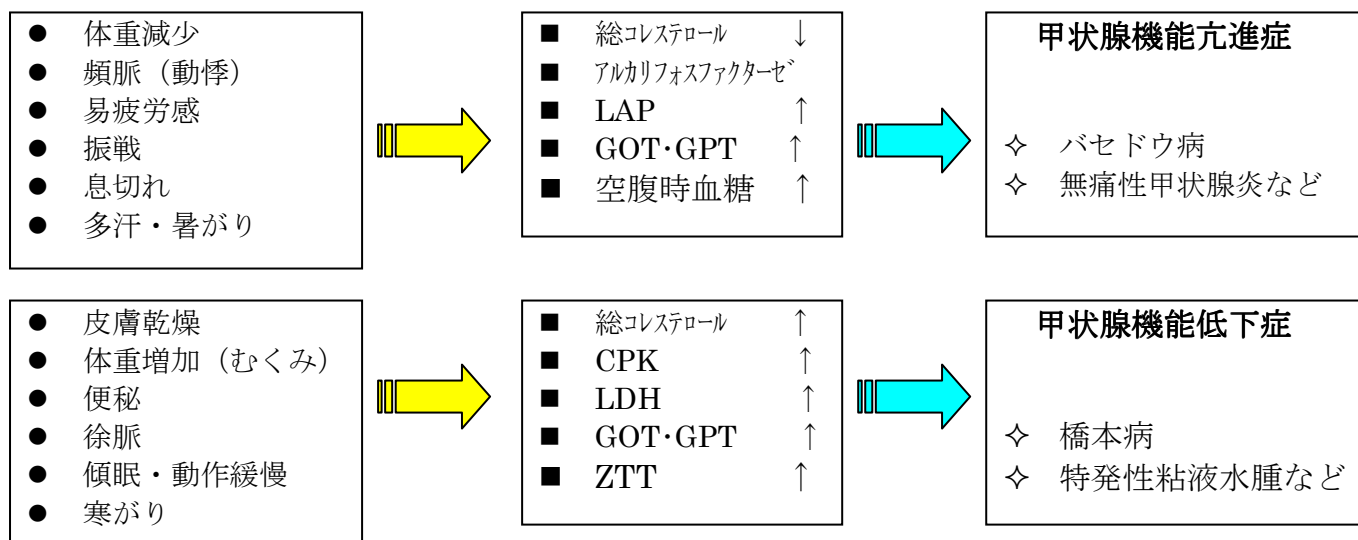
5. 最後に

このように甲状腺の病気が原因でいろいろな身体症状が起こります。表1に示されるような症状があったら、甲状腺機能異常の疑いもありますので甲状腺機能検査をしてもらうとよいでしょう。

表 1 甲状腺ホルモンの過不足による症状

甲状腺ホルモンが多すぎる症状	診療科	甲状腺ホルモンが足りない症状
倦怠感、疲れやすい、体重減少、 微熱、多汗、動悸（頻脈）息切れ、 口渇、下痢、甲状腺のはれ	内科（循環器・消化器など）	疲れやすい、眠気、体重増加、 むくみ、寒がり、めまい、徐脈、 息切れ、便秘、関節痛、食欲低下
イライラ、集中力低下、落ち着き なし、疲れやすい	小児科	成長遅滞、動作緩慢
イライラ、集中力低下、落ち着き なし、神経質、不安感、不眠	精神科	精神活動遅滞、うつ状態、眠気、 記憶力低下、言語緩徐
月経不順、月経過少、無月経	産婦人科	月経不順、月経過多
手指振戦、筋力低下、頭痛、 周期性四肢麻痺（男性）	神経内科	言語緩徐、動作緩慢、筋肉痛、 頭痛
皮膚が温かい、顔面紅潮、湿潤、 多汗、脱毛、むくみ、かゆみ、 じんましん、にきび、つめの変形	皮膚科	乾燥、脱毛、発汗低下、かゆみ、 むくみ
甲状腺のはれ	耳鼻科	めまい、声がれ、舌肥大、聴力 低下、甲状腺のはれ
眼球突出、眼裂開大、まぶたの はれ、複視	眼科	まぶたのむくみ

図 3 症状・検査値からみた甲状腺疾患の診断方法



医療法人将優会クリニックうしたに
理事長・院長 牛谷義秀